



平成22年10月27日
独立行政法人森林総合研究所関西支所

2010年代のための里山シンポジウム
— どこまで理解できたか、どう向き合っていくか —

ポイント

・近年、社会の期待の高まる中で、里山についての研究は大きく進むと共に多様な広がりを見せています。本シンポジウムでは、里山形成や利用の歴史、現状と今後の管理手法など様々な研究分野から解説を行い、さらに、今後の里山との向き合い方について、里山管理に関わる専門分野の研究者、行政、NPO等で議論を行います。

概要

里山林は森林面積の約3割を占めており、身近な自然環境として重要です。1950年代からの燃料革命により放置された里山では、ナラ枯れ（伝染性流行病）が拡大するなど健全性が低下しています。人為的に維持されてきた里山を今後も健康に持続させるには、単なる保護ではなく、人が積極的に自然と関わる事が重要であるとわかってきました。今後の管理の方策を決めていくには、人文社会科学、自然科学の多分野にまたがる学術情報や知識をまず整理して、それを研究者、行政、NPO等の里山保全関係者が共有し、共通の認識に基づいた議論を行う必要があります。

本シンポジウムでは、2010年代の里山研究、里山保全の方向を考えていくためのプラットフォームを提供したいと考えています。里山林形成の歴史から近年の健康低下の原因と回復手法に関する話題まで、様々な角度からお話しします。また、同時にポスターセッションを行います。

日時：平成22年10月30日（土）10:00～31日（日）16:40

会場：大阪市立自然史博物館（大阪府大阪市東住吉区長居公園1-23）

プログラム：http://www.fsm.affrc.go.jp/Old/sympo_20101030-31.html および別紙のポスターに掲載。

対象：参加費は無料で、どなたでも参加いただけます。

主催：独立行政法人森林総合研究所関西支所、大阪市立自然史博物館、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所「日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討」プロジェクト

問い合わせ先など

独立行政法人森林総合研究所 関西支所長

藤井智之

シンポジウム事務局担当者：森林総合研究所関西支所

大住克博、奥 敬一

広報担当者：森林総合研究所関西支所 研究調整監 鳥居厚志

Tel：075-611-1201（代）

Fax：075-611-1207

本資料は、京都府記者クラブに配布しています。

背景

1980年代に里山の意義の再発見が行われ、里山研究は景観生態学、保全生態学を中心に、1990年代以降大きく進みました。1990年代には市民による里山保全の展開があり、「全国雑木林会議」や「森林と市民を結ぶ全国の集い」が初めて開催されました。2000年代は、景観生態学、保全生態学以外の多くの分野からの知見が増えました。さらに、行政による施策・事業展開があり、各地の自治体に里山条例ができました。しかしこの時期には、皮肉なことにナラ枯れ（伝染病による集団枯死）が本州各地で増加して、里山の不健康化が進み、持続性が危うくなってきました。また、放置林では生物多様性の低下の問題も指摘されています。里山の保全活動が活発になり、様々な形で進められていますが、里山の機能を十分に引き出すための具体的な方策については、科学的な検討がほとんどなされてきませんでした。

近年は、森林の二酸化炭素吸収、国土保全や癒し・保健などの多様な機能が重要視されるようになり、里山の健康回復と持続性確保のための長期的な管理手法の開発が求められています。森林総合研究所関西支所では、里山再生のための実証試験を滋賀県や京都府で行っており、木質資源の利用方法、生態系の変化、経済性、炭素収支の解析を進めています。実現性のある里山管理手法を示し、低炭素社会への転換を意識した「豊かな生活スタイル」として社会に提案する予定です。今後、健康な里山を再生し維持するには、里山の成立や利用の歴史、最近の整備活動の発展などについて整理し、関連分野の研究者や里山整備の指導者が共通認識を持って検討することが重要であるため、本シンポジウムを開催することにしました。

過去の関連研究の報告および広報冊子は下記 URL からご覧になれます。

<http://www.fsm.affrc.go.jp/Nenpou/>

内容

第一部（10月30日）は、里山とは何か？というテーマで、「里山は「自給」的システムであったか？」「千年、百年、数十年スケールでの森の移り変わり」「里山の土地利用変化」など、7題の報告を行います。社会科学と自然科学の両面から、里山の成り立ちについて解説します。

第二部（10月31日）は、里山をどうするか？というテーマで、「人為攪乱とナラ類」「不安定化する里山生態系」「市民参加による里山保全の社会学」「里山からの資源利用は社会も豊かにできるのか」など、6題の報告を行います。里山の現状の解析結果から今後の里山保全手法について提言し、最後に総合討論を行います。